



Title	長編小説『裏面』に至る素描画家アルフレート・ク ビーン：初期の芸術展開と文学的表象
Author(s)	小松，紀子
Citation	独文学報. 2023, 39, p. 43-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103320
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

研究ノート

長編小説『裏面』に至る素描画家アルフレート・クビーン

初期の芸術展開と文学的表象

小松紀子

はじめに

グロテスクで幻想的な画風の素描画家であり、また挿絵画家としても知られるアルフレート・クビーン Alfred Kubin (1877–1959) が1908年に執筆し1909年に出版したのが、自作の51枚の挿絵と地図を付した長編小説『裏面 ある幻想的な物語』*Die andere Seite. Ein phantastischer Roman* である(※1)。この小説では、夢の国の都ベルレでの不思議な生活と地獄絵図のような夢の国の崩壊が、一人称の語り手である素描画家の目を通して語られている。

『裏面』は主に次のような側面から解釈、研究されてきた。素描画家である作者クビーン自身との関係を扱った自伝的または精神分析学的側面(※2)、都市に焦点をあて、当時の崩壊寸前のオーストリア帝国を問題とする時代批判的側面からや都市論側からの研究(※3)、そして当時の同時代文学や哲学からの影響関係の考

テキスト

Kubin, Alfred: *Die andere Seite. Ein phantastischer Roman*. Mit 51 Zeichnungen und einem Plan. Frankfurt am Main 2009. Text und Zeichnungen folgen der Originalausgabe von 1909 bzw. der 1968 bei Nymphenburger Verlagshandlung erschienenen Ausgabe. A と略記し、括弧中に略号とページ数を記す。

Kubin, Alfred: *Aus meinem Leben*. In: Ders.: *Aus meinem Leben. Gesammelte Prosa mit 73 Zeichnungen*. Hg. von Ulrich Riemerschmidt. München 1974. この自伝を AmL と略記し、括弧中に略号とページ数を記す。

- 1 以下『裏面』と略記する。
- 2 Vgl. Sachs, Hans: *Die andere Seite*. In: *Imago. Zeitschrift für Anwendung der Psychoanalyse auf die Geisteswissenschaften*. Hg. von Sigmund Freud. Bd.1. Heft 2. 1912, S. 197-204.
- 3 Vgl. Jünger, Ernst: *Die Staubdämonen*. In: Ernst Jünger, Alfred Kubin: *Eine Begegnung*. Frankfurt am Main, Berlin, Wien 1975, S. 111-117; Hofmann, Werner: *Über einige Motive des Romans »Die andere Seite«, 1909*. In: Hoberg, Annegret (Hg.): *Alfred Kubin 1877-1959. Ausstellungskatalog München/ Hamburg 1990/1991*, S. 103-108.

察や、ドイツロマン主義に連なる20世紀初頭の幻想小説ジャンルという幻想文学研究の側面からの研究などである(※4)。これらのアプローチはどれも重要な観点であろう。だがそもそもこの小説は職業作家による出版目的で書かれたものではない。1911年の自伝によれば、彼の精神的な発展の途上で生まれたものだという(※5)。絵ではなく文章を書くという形でしか表せなかった当時の彼の創作活動におけるエネルギーの発露がこの作品の根幹をなすと考えられる。

よって本論考では、まず作者クビーンに焦点を当て、『裏面』へと向かう1908年までの彼の芸術への取り組みや考え方を追う。クビーンの文筆活動において長編小説は『裏面』一作品しかない。だが手紙や、画集に添えた自伝、新聞雑誌などに書いた文章、また生前の出版物として短い物語や思い出をまとめた散文集などがある。それらは後に再編集され、散文集『私の仕事場から』*Aus meiner Werkstatt* と同名の自伝を含む散文集『私の人生から』*Aus meinem Leben* として出版されている。ただクビーンの多くの手紙や日記、ノート、メモ類は、編集出版されないままクビーン・アーカイヴや博物館等に保管されている。ここでは編集出版されている書簡や自伝、散文集およびガイアーの調査で書き起こされた散文断片資料をもとに(※6)、クビーンの芸術への取り組みと考え方がどのように『裏面』執筆へと至り、文学においてどのような形で昇華され表象されているのか考察を試みたい。

4 Vgl. Geyer, Andreas: *Träumer auf Lebenszeit. Alfred Kubin als Literat*. Wien, Köln, Weimar 1995; Cersowsky, Peter: *Phantastische Literatur im ersten Viertel des 20. Jahrhunderts. Untersuchungen zum Strukturwandel des Genres, seinen geistesgeschichtlichen Voraussetzungen und zur Tradition der „schwarzen Romantik“ insbesondere bei Gustav Meyrink, Alfred Kubin und Franz Kafka*. München 1983.

『裏面』の研究史はBrunn, Clemens: *Der Ausweg ins Unwirkliche. Fiktion und Weltmodell bei Paul Scheerbart und Alfred Kubin*. Hamburg 2010, S. 157-161に詳しい。

5 AmL 41.

6 ガイアーの調査で新たに書き起こされた資料は、前掲書の巻末 S. 233-247に収録されている。巻末資料1から5は以下の通り：1『アルフレート・クビーン人間と創造についての幾つかの言葉』断片 *Einige Worte über das Schaffen und den Menschen Alfred Kubin* (推定執筆年1901/02年頃) (『幾つかの言葉』断片 *Einige Worte* と略記)。2『女性』断片 *Weiber-Fragment* (推定執筆年1901/02年頃)。3『クビーン愚者の人生から』断片 *Aus Kubin, des Narren, Leben* (1899-1902年頃執筆) (『愚者』断片と略記)。4『妹マリア・ブルックミュラー宛ての手紙』(『自殺の手紙』*Selbstmordbrief*と呼ばれている)(1904年2月)。5『死についての断片』*Fragment über den Tod* (1906-1908年頃執筆)。

クビーン芸術の起点：クリンガー作品との出会いと幻視・ヴィジョン

クビーンは、1911年に出版した画帳『ザンザラ』*Sansara*に載せた自伝『私の人生から』で、次のように『裏面』執筆の経緯を語っている。

秋、私は友人のフリッツ・フォン・ヘルツマノフスキーとともに上部イタリアとヴェニスへの旅に出た。旅の印象に虚心に身をゆだねていたが、帰路——ガルダ湖畔で——再び素描がしたいという震えるほどの欲求を感じた。それがどういうことになるか分からなかったし、そんなことは全く考えなかった。だが明らかに全ての環境を新たな目で見えるようになったこと、内的な輝きが私の中で活気づいたことが分かった。渴望に大いに逸り帰宅した。だが素描しようとする全く上手くいかず、意味のあるまとまった線を描くことが出来なかった。まるで4歳児が生まれて初めて自然を写生するときのようだった。この新しい現象に茫然自失した。というのも、繰り返すが、私の内面はすっかり仕事欲に満ちていたのだから。とにかく何かして発散しようと、私は自分で冒険物語を考えだし、書き始めた。するとアイデアが溢れるように襲ってきて、日夜、執筆にかられた。そして12週間後、私の幻想小説『裏面』が書き上げられた。4週間はそれに挿絵を付けた。(AmL 40-41)

1908年31歳のとき仕事の行き詰まりと重い抑鬱症の気晴らしに出た旅行中にクビーンは突然、創作意欲が沸き『裏面』を書いたという。長編の小説を一気に書き上げるとは、よほどの衝動があったのだろう。『裏面』執筆以前における自らの「書くこと」に関する態度についてクビーンはこう述べる。「私は文学的なものに決定的な判断を下すことが出来ない、これまで出版できるようなものを書いたことなどなかったのである。それどころかものを書くこと自体が性に合わない行為で、これまでの人生で詩を書いたことなど一度たりともなかったのだ」(AmL 41)。だが本当に一度も文学的なものを書こうとしたことのない者がいきなり出版可能な長編など書けるだろうか。以下、実際のところクビーンがどれほどそしてどのように文学と関わっていたのか、クビーンと文学の関係を跡付けていく。

「ミュンヘンは私の第二の故郷だった」(※7)と1930年53歳のクビーンは書いている。鬱屈した少年時代に対して、このミュンヘン時代はクビーンにとって初め

て仲間を得て「自由」を得た時代であった。そもそもクビーンは職業として画家を目指していたわけではない。小さい頃から絵を描くことを好んでいたというものの、1898年春21歳のとき家族の友人の勧めでミュンヘンへ来るまで、クビーンは正式な絵画修行をしたことはなかったという。意識して美術作品を鑑賞したこともなかった彼が圧倒的な印象を得たのがミュンヘン到着の二日後に訪れたアルテ・ピナコテークであり、それが彼の最初の美術的体験であった。1911年の自伝には、10歳での母の死や父との不仲に加え、学業や写真家のもとでの見習い修行も上手くいかず、希望して入った軍隊も精神的な衰弱によりすぐに除隊するなど、度重なる挫折の経験の末、どこへもいくことが出来なくなったためにミュンヘンの画塾に入ることになった経緯が綴られている(※8)。そのクビーンが画家の道へと進む決定的な出来事が1898年のマックス・クリンガーのエッチングとの出会いであった。彼はエッチング連作『手袋の発見に関するパラフレーズ』を見て歓喜に慄く。「そこにはありとあらゆる感覚の世界の暗示的な表現に十分な活動の余地を与える全く新しい芸術があった。この作品の前で私は生涯このようなものを創る行為に身を捧げることを誓ったのだ」(AmL 25)。自伝はその後クビーンが熱に浮かされたように街を彷徨し、ヴァリエテで幻覚の嵐に襲われたという体験を伝えている。オーケストラが演奏し始めると周りのものが別の光をあてられたように透明さや鋭さを増したように感じ、周りの人間は獣のような顔に見え、音は嘲笑と囁きと轟音のすべてが合わさった何かの言葉のように聞こえてきたという。そしてクリンガーのことを考えつつ、今後自分はどのように描いてゆくべきか考えていると「いきなり白黒映像のヴィジョンが襲ってきた。それがどのようなものか説明など出来ない。私の想像力がどんなにおびたたく何千もの豊かなものを見せてくれたことか」(AmL 26)。この幻視体験をきっかけとしてクビーンの想像力は解放された。『裏面』執筆の契機となったガルダ湖畔での「震えるほどの欲求」(AmL 40)や、活気づいた「内的な輝き」(AmL 40)もこの精神的高揚に類したものと考えられる。

初期のクビーン絵画といえば、荒涼とした薄墨色の空間に、巨大な怪物や得体のしれない動物、骨や死体の山の上に立つ人や動物、偶像崇拜、奇妙に長い歪ん

7 Kubin, Alfred: *Über München*. In: Ders.: *Aus meinem Leben*. S. 98.

8 AmL 7-21.

だ身体や腹が膨らんだ女性、そして巨大な入り口へと吸い込まれてゆく人間の群れや軍勢が描かれた絵の数々が思い浮かぶだろう。こうした人の死にゆく運命や不安、圧倒的な力に対する無力さや絶望といった主題が、切り刻まれた肉体や歪んだ身体、女性、幻想の動物、巨大なものに対する人間の群れの小ささなどによって表されている。それは幻想的で、人間の意識下に渦巻く不安を可視化したような世界であり、モノトーン又は薄茶色や青灰色の無音を思わせる荒涼とした空間に不気味な悪夢の数々が繰り返されている。こうした絵画モチーフの数々は、後に『裏面』でもベルレ崩壊の描写の際、様々な場面で登場する。クリンガーのエッチングとの出会いによって己の幻想世界への確証を得たクビーンによる集中した初期創作期はおよそ1903年頃まで続く(※9)。

またミュンヘン時代で特筆すべきは、シュヴァーピングの作家たちとの親しい付き合いである(※10)。とくに1901年年明けのアトリエパーティで作家のマックス・ダウテンダイと知り合ったことは大きい。彼を通してクビーンはミュンヘンの作家たちの仲間になっていった(※11)。哲学好きだったクビーンは哲学的著作を考えていることを公言しており、後には「画家文士」*zeichender Literat* のイメージが定着してゆく。フランツ・ブライやオットー・ユリウス・ビーアバウムを中心とする雑誌『インゼル』のグループとも交流ができ、こうした作家たちとの繋がりが初期のクビーンの後援者となるハンス・フォン・ヴェーバーとの出会いやパウル・カッシーラーとの縁をもたらししたという(※12)。1902年12月クビーンはベルリンのカッシーラーのギャラリーで初の個展を開催することができた。いくつかの批評でも取り上げられ、クビーンの名が世に知られることとなる。1903年ヴェーバーは15枚の複製画を収録したクビーンの最初の画帳を出版する。このいわゆるヴェーバー画帳 *Weber-Mappe* は批評家の評価も上々で、さらにクビー

-
- 9 Vgl. Eschenburg, Barbara: *Kubins Frühwerk: Themen und Vorbilder*. In: Hoberg (Hg.), S. 91-102.
 - 10 Vgl. Hoberg, Annegret: *Kubin und München 1898-1921*. In: Hoberg (Hg.), S. 43-66; Heißenrath, Dirk: *Wort und Linie. Kubin im literarischen München zwischen 1898 und 1909*. In: Hoberg (Hg.), S. 67-90.
 - 11 Kubin, Alfred: *Erinnerung an Max Dauthendey*. In: Ders.: *Aus meiner Werkstatt. Gesammelte Prosa mit 71 Abbildungen*. Hg. von Ulrich Riemerschmidt. München 1973, S. 83.
 - 12 Hoberg: *Kubin und München 1898-1921*. In: Hoberg (Hg.), S. 44.

ンを世に知らしめた。こうしてクビーンは幻想的で怪奇的な作品の若手素描画家として一気に名をあげることとなった。だがあまりにも早く有名になったクビーンはその後、深刻な創作危機に陥ることになる。

創作危機と父の死：「世界放浪者としての息子」構想

1903年はウィーン分離派展やベルリン分離派展に出品するなど一見順調であったが、12月クビーンが交際していた女性が急死する。その後すぐ1904年友人の作家オスカー・A・H・シュミッツの妹で寡婦のヘトヴィヒ・グリュンドラーと知り合い結婚するが、このころから「以前のような精神の飛翔はできなくなった」(AmL 32)という。もちろん幾つか調和のとれた作品が生まれ、また暖色系の色彩が加わるなど画風に発展があったかもしれない。だが結婚後しばらくして妻ヘトヴィヒは病気のため療養所に入る。その後も彼女は様々な病気を患い手術や入院を繰り返す。結婚や家庭の不調はクビーンの負担となっていった。そして「無意識から明るい幻のように浮かび上がってくる具象的なヴィジョンがますます稀にますます弱まり、ついには全く現れなくなってしまった」(AmL 33)。

こうしたことから逃れ、新しい刺激を得ようとウィーンを訪れたクビーンはピーテル・ブリューゲル(父)の作品と出会い、クリンガーとはまた異なる衝撃を受ける。クビーンはブリューゲルの作品に非常に強い親近感を抱く一方、自分の追い求める芸術の形がすでに何百年も前に完成していたことを目の当たりにし、自分の作品の存在意義を問うことになる。「自分の旧作が味気ないものと思われたばかりか、ある種の嫌悪感さえ覚えたので、新たな仕事分野を探さねばならなかった」(AmL 34)。クビーンは深刻な創作危機に陥る。1905年糊を使った技法で淡い色調の絵を作成し、同年秋にはジャングルや南国の絵に取り組んだ。1906年には純粋なテンペラ画に力を入れ、同年ミュンヘンからオーストリアのツヴィックレットに移住した後は海底の風景や顕微鏡を使った絵に向かい、1907年にはゴーギャン風の絵画を描いた。本の挿絵にも着手する。様々なやり方にチャレンジしては放棄して、また新たなやり方を試す。1904年から1908年は自分独自のスタイルを探し求め苦悩した時期だった。そして1907年秋、作家ヴォルフスケールとともにボスニア・ダルマチアへの旅に出る。画風自体はこの旅行でのスケッチを機に、激しい線を縦横無断に走らせる即興のようなペン画素

描を獲得したといえるだろう(※13)。そして翌年の『裏面』の挿絵を通してそのスタイルを確立していく。背景に何も無い薄明の空間の中に対象物だけが浮かび上がる象徴主義的な初期の画風から、背景のしっかり描かれた風景スケッチへ。書き足せば足すほど黒く重さが加わる線画は、あたかも心の奥底の闇を表しているかのようで、そのまま心象風景へと転じている。

そしてこの模索の時期クビーンに何より大きな打撃を与えた出来事が父の死である。ボスニア・ダルマチアの旅から帰って間もない10月2日であった。

この不幸に際して我々という存在の内的な真の空しさが深く印象付けられた。おそらくどんな運命の転換や反省によってももはやこの虚無感は変わらないだろう。私の心の奥底をかき乱したのは、この死という出来事ではなく、自分の集約的な生の一部がこうも不意に無に帰してしまうということを魂で理解したことだった。(AmL 39)

父という存在の喪失を通してクビーンが認識したのは、人間という存在の抱える虚無感だという。こうした「父」を通じた思索に関して、クビーンは世紀転換期に書いたという「世界放浪者としての息子」の基本理念を自伝で紹介している。

それ自体が時間外に永遠に存在する原理——これを「父」と名付けた——が、究明しえぬ原因から、自意識——「息子」——を、それと分かつことができぬ世界とともに創ったのだと私は考えた。ここではもちろん私自身が「息子」であった。[……] 私はよく夜に「世界放浪者としての息子」の哲学的で詩的な個々の詳論で多数のノートを埋めたものだ。(AmL 24-25)

『裏面』のクライマックスに、夢の国の支配者パテラと彼に敵対するアメリカ人ハーキュリーズ・ベルが巨人化し神話の如き闘いを繰り広げる場面がある。このパテラとベルがそれぞれ父と息子を表すという解釈は、早くも『裏面』出版の3年後ザックスによってなされている(※14)。だが「世界放浪者としての息子」の

13 Vgl. ebd., S. 53-56.

14 Sachs: a. a. O., S. 197-204.

テキストが発見されていない以上(※15)、「父と息子」構想が自伝で述べているように世紀転換期に明確な形で存在していたかは大いに疑問であろう(※16)。むしろ小説の思想的後付けと考えられる。少年時代には反発し酷く憎んだ父だったが、画家として成功した後は良好な関係だったと自伝では言っている。だが父への感情は複雑なものだった。それは1904年2月の妹マリア・ブルックミュラー宛ての手紙で、自分に無理解な父親とは縁を切ると言った後にそれは愛情ゆえだという言葉にも表れている。「結局愛情なんだよ。パパが今日でもとにかく私のことを感情の無い子供と見ているとしてもね、——もちろんパパの短絡的な考えや私という人間に対する絶対的な無理解でのことだけだ」(※17)。反発しつつも大いなる支柱であった父を失ったことは、クビーンにとって、自分という世界を形成する原理を失うことに等しいものだったのだろう(※18)。父の存在とその喪失が彼の世界観に、そして『裏面』に通じるひとつであることは違いない。

『裏面』以前の遺稿断片

次に『裏面』以前の遺稿断片を見ていこう。自伝で述べているように『裏面』は突然の創作意欲で書かれたものかもしれない。だがそれ以前、写真家の伯父のところで見習いをしていた17歳頃ショーペンハウアーの著作に出会って以来、哲学書を愛好していたクビーンは、精神的重圧を感じると哲学に逃げ込んでおり、自分なりの世界観や死生観をスケッチブックなどに断片的に書き付けていた。ただしそれらは非常に判読が困難な筆跡であるらしい。ここでは書き起こされたものの中である程度まとまった量と内容を持つ『幾つかの言葉』断片を中心に、『裏

15 このテキストは長らく自伝を根拠として存在するものとされてきたが、ガイアーは調査の結果存在しないという見解を述べている。Geyer: a. a. O., S. 31.

16 オットー・ヴァイニングの1904年の遺稿集 *Über die letzten Dinge* 中のひとつに非常に類似した箇所があることが指摘されている。Ebd., S. 48.

17 *Selbstmordbrief*. In: Ebd., S. 243. Bl.1r.

18 自分という存在の基盤とみなしたものが少しでも崩れることによる精神不安は、それまでのクビーンの人生において何度かあった。10歳のとき母の死に際して取り乱した父を見て不安に陥った。また18歳のころ志願して入隊しオーストリア軍という強大な組織の一員であることに幸福を見出していたが、部隊司令官の急死の際、非常な不安を感じ精神錯乱状態に陥り、入院、除隊している。(AmL 10 u. 19-20)

面』以前のクビーンの記事と思考傾向について考察する。

『幾つかの言葉』断片は、「クビーン」という人物について、一部一人称になる箇所もあるものの大部分「クビーン」の親友と称する語り手によって語られている。「まず彼の作品、そして彼という人物。私は彼の書いたもの全てを知っている。——ひとつ確かなことがある。クビーンの中に最悪の天才が最も素晴らしく最も強力に混っている。この天才は悪魔なのだ」(※19)。『幾つかの言葉』断片の「クビーン」は悪魔的な天才、怪物として語られる。愚かな人間たちは彼の芸術を認めず、「クビーン」は天才ゆえの孤独と狂気の中で絶望し破滅に向かう運命にあるが、愛を求めるという内容である。これは明らかに彼が好んでいた哲学、ショーペンハウアーやニーチェの影響が大きい(※20)。この断片から読みとれるのは、ガイアーの見るように、クビーンが人からこう見られたいと望む自らの姿にはかならない(※21)。天才芸術家の苦悩が壮大な身振りで表されているが、そこに確固たる哲学が示されているようには見受けられない。『愚者』断片も同様である(※22)。ただし『幾つかの言葉』断片で語られる天才の破滅や死へ向かう運命は、『自殺の手紙』では死への憧れや救済としての死(※23)、『死についての断片』では同様に壊滅という目標に追いやられる運命(※24)として展開されており、それが『裏面』のパテラの死と夢の国の崩壊のモチーフへとつながると考えられる。

『幾つかの言葉』断片の天才の顔、偉大な人物の容貌は次のように描写される。「この頭部は一度でも詳細に見た人は忘れられないだろう。ここでは天才を最も曇りのない姿において研究することができるのだ」(※25)。「そのとき彼の兄弟た

19 *Einige Worte*. In: Geyer: a. a. O., S. 235. Bl.5v.

20 Ebd., S. 32ff. またクビーンにおける哲学の影響に関しては Hewig, Annelise: *Phantastische Wirklichkeit. Interpretationsstudie zu Alfred Kubins Roman „Die andere Seite“*. München 1967, S. 20 をはじめ多くの研究者によって言及されている。

21 Geyer: a. a. O., S. 32.

22 『愚者』断片と『女性』断片では女性と性に関する苦悩が主な内容をなす。

23 *Selbstmordbrief*. In: Ebd., S. 244. Bl.3r.

24 *Fragment über den Tod*. In: Ebd., S. 246. Bl.11r, 12r u. 13r. こうした彼の死生観には フィリップ・マインレンダーの哲学の影響が大きいことも指摘されている。Ebd., S. 87ff.

25 *Einige Worte*. In: Ebd., S. 238. Bl.22r.

ちとの類似は明白だ。ナポレオン、ベートーヴェン、ゲーテ、ショーペンハウアーやゴヤのような人物の容貌がここで統合され繰り返されている」(※26)。「この目は私にとって最も美しいもので、すべてが表現されている、すべての悲しみ、世界のすべての恐怖、最高の諦念が。子供のような憂いを帯びた口と顎が見事に顔を締めくくる。——この顔が彼の運命のすべてを表している」(※27)。このような容貌はまさに『裏面』のパテラのそれに通じている。パテラはギリシアの神のような美しさを持ち、語り手はその魔力を持った目に魅入られる(※28)。

これら断片はもちろん人に見せることを前提としていない着想の習作段階であるが、これを見る限りでは世界や人間を鋭く見抜いた独自の箴言や論理というものにはなっていなかったようである。また「その [= 地球の] 偉大な息子」(※29)という表現が一か所出てくるものの、自伝で示されているような「父と息子」に基づく世界観は見られない。ただ、「乳房から噴き出す黒ずんだ粘液と血」や「死の赤い馬」「緑がかった死体ガス」など(※30)、動物やその他の生物を用いた比喩表現や印象的な色の使用など非常にビジュアルな描写をしている部分があり、それは『裏面』でさらに豊かになってゆく。こうした描写の萌芽、また世界を創る偉大な人物と運命的な破滅への突進など『裏面』の骨格となるイメージは、世紀転換期の頃からずっとクビーンの中にあり、それを何とか哲学的な形で文章化しようと試みていたと言えるだろう。

『裏面』の語り手

クビーンは『裏面』の主人公として、ミュンヘンに妻と二人で暮らしている30歳ほどの素描画家という、作者本人を連想させる語り手を据えている。もっとも冒頭で「パテラと知り合ったのは60年以上前のザルツブルクでのことで」(A 9)と枠物語であることを示し、執筆当時31歳の作者とは別の虚構の人物だとしている。だがそれにも関わらず明らかに主人公はクビーンの分身である。幻想画家

26 Ebd., S. 238. Bl.23r.

27 Ebd., Bl.34v.

28 A 14や123-125や210や276におけるパテラの目の描写。

29 *Einige Worte*. In: Geyer: a. a. O., S. 234. Bl.2v.

30 Ebd., S. 240. Bl.42v.

クビーンの見ている世界を言語化して示したということであろう。そのことは原稿完成後すぐの12月23日のヘルツマンノフスキー宛の手紙からも明らかだ。

要するに絵の周りに本全体が書かれる。[……] 小説形式の説明文がいわば骨組みなんだ。私個人としては作家として登場したいとは思ってないよ。[……] この本の後で私の素描や絵全般がよりよく理解されることを心から願ってる。——この理解を呼び起こすことがこの作品全体の目的なんだ(※31)。

ところでこの語り手は画家ではあるが、断片の「クビーン」のような悪魔的な天才ではない。芸術家であることよりも、むしろ旅費として提示された大金に心動かされたり、すぐに不平不満を口にし、頭に血がのぼるとその勢いのまま行動してしまったりする、その時々感情に流されやすい性質(※32)だが、当時のごく一般的なドイツ人市民として描かれている。この語り手は夢の国での出来事を詳細に報告するが、それについての感想や意見、判断をほとんど述べることがない。出来事を映す目、カメラの役割に徹しているのである。このような語り手の態度は、夢を見ているときの感覚に近いと言えるかもしれない。物語のごく最初のところで、パテラの代理人ガウチュに「夢の国の住人は夢以外の何ものも信じておりません。自分の夢以外の何ものも」(A 13)と言わせており、この物語がそもそも語り手自身の夢である可能性を示唆している。このようにこの語り手は一方ではこれまで絵画で表現してきたクビーン世界の紹介を暗示するための存在あり、他方その壮大なヴィジョンを映し出すカメラなのである。

また語り手は最後まで名前が出てこないが、その妻もまた同様に名前がない。妻は登場人物の一人というより、語り手と二人一組で役割を担う存在であるようだ。上述したように語り手は自分の内心を言語化しない。代わりに妻を通して語られる。妻は不思議な夢の国の出来事を常識に照らし合わせていかに異常であるか言語化し確認するための語り手のもう一つの声なのである。夢の国に入る直前、夢の国に至る門である真っ黒な巨大な穴に足を踏み入れたとき、語り手は

31 Herzmanovsky-Orlando, Fritz von: *Der Briefwechsel mit Alfred Kubin 1903 bis 1952*. Hg. und kommentiert von Michael Klein. Salzburg und Wien 1983, S. 21. 12K.

32 語り手の基本的な性質は「最も強い感情の揺れに負ける」(A 18) こと。

「電撃が走ったように未知の恐ろしい感情が自分を襲った」(A 47) と語るが、それが何を意味するのかは「死ぬほどの不安をその顔に反映させて声を震わせて囁いた」(A 47) という文の後「もう二度とここから出られないのね」(A 47) と妻が言うことで明確になる。妻は語り手があえて口にしない不安の内容を声にする役割を持ち、やがてパテラの影に怯えて衰弱し死に至る。妻との会話を通して夢の国の異常性を明らかにしていた語り手は、妻の死後、目の当たりにする夢の国の崩壊を、映像のごとく鮮やかに映し出してゆく。

おわりに

以上、素描画家クビーンの『裏面』に至る芸術的發展と思考をたどった。クビーンはクリンガーのエッチングとの出会いで自分の進むべき道に確信を得たことによってこれまでの精神的圧迫が解消したのである。クビーンは沸き上がるヴィジョンを己の芸術に昇華し、幻想的でグロテスクな初期作品群を生み出した。だが結婚生活や妻の病氣といった現実が徐々に精神的な負担となっていく。精神的飛翔が出来なくなったクビーンは未知の地を旅することで現実の風景を即興の線で写し取るペン画素描スケッチへとたどり着く。そうして帰郷したクビーンを襲ったのが父の死であった。精神的支柱を失い大きな打撃を負ったクビーンは父の死から1年後の旅行中に激しい創作衝動に駆られ、帰国後、小説『裏面』を書き上げる。この小説はこれまで絵として昇華していたクビーン芸術の源である彼の内なる想像世界を文章で表したものである。書くことで父親の死を乗り越える意味もあっただろう。だがそれだけではなく、これまでクビーンが絵画作品で扱ってきた主題や表現形式、哲学的思索、現実の父親との関係や「父と息子」に基づく世界観など、様々なものが『裏面』へと通じている。ただし、クビーンの女性像における性及び生と死に関して、今回は取り上げることが出来なかったので『裏面』解釈とともに今後の課題としたい。